

## メッセージアウトライン 出エジプト記18:1-27 「イテロの助言」

[1]「さて、モーセのしゅうと、ミディアンの祭司イテロは、神がモーセと御民イスラエルのためになさったすべてのこと、どのようにして主がイスラエルをエジプトから導き出されたかを聞いた」

「イテロ」…出2:18ではレウエルという名。イテロは祭司としての公式の称号と思われる。彼は神がモーセとイスラエルになさったすべてのことを聞いた。モーセがエジプトに行ってから活躍、神が十の災いでエジプトを打たれたこと、紅海の水を超自然的に分けてくださってイスラエルの民がそこを渡ってシナイの荒野に入って来たこと。そういったことがミディアンの地にいるイテロの耳にも入って来ていたのである。このミディアンはシナイ半島のアカバ湾に面した地であった。もちろん今日のような通信手段は何もないのでこのような情報は交易商人などによって何日もかけて各地に伝えられていったことであろう。それがイテロのところにも届いたのである。

[2-4]「それでモーセのしゅうとイテロは、先に送り返されていたモーセの妻ツィボラと彼女の二人の息子を連れて行った。そのひとりの名はゲルショムで『私は異国にいる寄留者だ』という意味である。もう一人の名はエリエゼルで、『私の父の神は私の助けであり、ファラオの剣から私を救い出された』という意味である」

モーセの妻と二人の息子たちはモーセがイテロのもとからエジプトに戻って行く時に、そこで予想される危険を考えて途中で送り返していたのである。→出4:24~26の頃か。息子たちの名前の説明が長い、その名は文字通りにはそれぞれ、「そこで寄留者である」、「神は助け」という意味となる。長男の名はミディアンにおいてのモーセの孤独感を表しているが、次男の名は彼の信仰と希望を表している。

[5]「こうしてモーセのしゅうとイテロは、モーセの息子と妻と一緒に、荒野にいるモーセのところにやって来た。彼はそこの神の山に宿営していた」

「神の山」…シナイ山のこと。モーセが羊飼いをしていた時、燃える柴の中から呼びかける神の声を聞いた場所。出19:2ではイスラエルの民はシナイの荒野に入り、そこで、山の前に宿営したと書かれている。18章の出来事も時期的にはこれと同じであろう。

[6-7]「イテロはモーセに伝えた。『あなたのしゅうとである私イテロが、あなたの妻とその二人の息子と一緒に、あなたのところに来ています』モーセはしゅうとを迎えに出て行き、身をかがめ、彼に口づけした。彼らは互いに安否を問い、天幕に入った」

久しぶりの妻と子たち、そしてしゅうととの再会。モーセにとってこれは大きな喜び

と励ましの時となったことであろう。

[8-9]「モーセはしゅうとに、主がイスラエルのために、ファラオとエジプトになさったすべてのこと、道中で自分たちに降りかかったすべての困難、そして主が彼らを救い出された次第を語った。イテロは、主がイスラエルのためにしてくださったすべての良いこと、とりわけ、エジプト人の手から救い出してくださったことを喜んだ」

モーセは口の重い人であったが、この時ばかりは大きな喜びをもって次から次へと主がなされたすばらしいみわざを語ったであろう。そしてイテロはモーセの口から語られる一つひとつのことに驚きと喜びをもって聞き入り、主がなしてくださったすべての良いこと、特にエジプト人の手からの救いを喜んだのであった。

[10-11]「イテロは言った。『主がほめたたえられますように。主はあなたがたをエジプト人の手とファラオの手から救い出し、この民をエジプトの支配から救い出されました。今、私は、主があらゆる神々にまさって偉大であることを知りました。彼らがこの民に対して不遜にふるまったことの結末によって。』」

事実というものは当事者から直接聞く時に、より明らかになるものであり、イテロもイスラエルがエジプトで受けていた苦難、そしてエジプト脱出に至る力強い主の救いのみわざをモーセから直接聞いて主を大いに賛美したのであった。

[12]「モーセのしゅうとイテロは、神への全焼のささげ物といけにえを携えて来たので、アロンとイスラエルのすべての長老たちは、モーセのしゅうととともに神の前で食事をしようとやって来た」

イテロはミディアン人の祭司であったが、イスラエル人の神、主の祭司ではなかったであろう。それは11節の彼のことがからもわかる。彼は他の偶像の神を信じていたが、モーセの語ったことを聞いてイスラエルの主なる神の唯一性、偉大さを認めて、全焼のささげものと他のいけにえとをささげ、主なる神の前でモーセとイスラエルの長老たちと食事をしようとしたのである。

「全焼のささげもの」とは全焼のいけにえのことであり、それは神への全き献身を表すものであるが、それは当時の偶像の神々に対してもなされていたのであろう。しかし、今、イテロはイスラエルの神、主こそ真の神であることがわかったので、このように主にいけにえをささげて礼拝したのであろう。

[13-16]「翌日、モーセは民をさばくために座に着いた。民は朝から夕方までモーセの周りに立っていた。モーセのしゅうとは、モーセが民のためにしているすべてのことを見て言った。『あなたが民にしているこのことは、いったい何ですか。なぜ、あなた一人だけがさばきの座に着き、民はみな朝から夕方まであなたの周りに立っているのですか。』モーセはしゅうとに答えた。『民は神のみこころを求めて、私のところに来るのです。彼らは、何か事があると、私のところに来ます。私は双方の間をさばいて、神の掟とおしえを知らせるのです。』」

この場合の「さばく」とは判断する、評価する、判決を下すなどの広い意味を含む

ことばである。

民はモーセに自分たちの争いごとや訴えを聞いてもらい、双方の間をさばいて神の掟とおしえを知らせてもらおうと彼のところに来て、朝から夕方まで順番待ちをしていたのである。

「神の掟とおしえ」とはこの時点ではまだ律法も与えられていないので、先祖アブラハム以来のイスラエルの民に言い伝えられてきた神の掟とおしえのことであっただろう。しかし、その内容は後に与えられる律法と矛盾するようなものではなかったであろう。いずれにしても、この時モーセが担っていた重要な任務は、霊的な事柄はもちろん、政治的、法的、家庭的、教育的な問題等もみな一身に背負いこんで判断し、評価し、決定をするという非常に重いものであった。

イスラエルの民は二百万人ほどいたと思われるので、問題は常に起こっていたであろう。そしてそれらの対処がみなモーセ一人に集中していたのである。

[17-18]「すると、モーセのしゅうとは言った。『あなたがしていることは良くありません。あなたも、あなたとともにいるこの民も、きっと疲れ果ててしまいます。このことは、あなたにとって荷が重すぎるからです。あなたはそれを一人ではできません。』」

イテロはたちどころに問題点を見抜いた。いかに高い教育を受け、才能豊かであったとしても、モーセ一人ではこのことは到底できない。荷が重すぎる。それでイテロは大切な助言をする。

[19]「さあ、私の言うことを聞きなさい。あなたに助言しましょう。どうか神があなたとともにいてくださるように。あなたは神の前で民の代わりとなり、様々な事件をあなたが神のところに持って行くようにしなさい」

これは第一の勧めであり、モーセが神の前にとりなしの祈りをするということである。民に代わって神の前に出るということは、神によって指導者として立てられたモーセ以外の人にはできることではなかった。

[20]「あなたは掟とおしえをもって彼らに警告し、彼らの歩むべき道と、なすべきわざを知らせなさい」

これは第二の勧め。モーセが民に宗教教育と道徳教育の根本を教える責任を持つということである。これはイスラエル民族の行くべき方向を決定する最も重要なことである。

[21-22] 第三は「民全体の中から、神を恐れる、力のある人たち、不正の利を憎む誠実な人たちを見つけ、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として民の上に立て、日常的な問題、小さな事件は彼らにさばかせる。そして大きな事件はモーセのところに持ってこさせ、彼が直接さばく。これは役割の分担であり、組織化である。一人のできることに限りがあるが、役割を分担して組織化すれば多くのことができ、ものごとをスムーズに進めていくことができるのである。

これらをまとめれば、モーセにしかできないことをモーセがして、他の人々にもそ

の役割を果たせることは他の人々に委ねるということである。

[23]「もし、あなたがこのことを行い、神があなたにそのように命じるなら、あなたも立ち続けることができ、この民もみな、平安のうちに自分のところに帰ることができるでしょう」

イテロは自分の助言をモーセが実行するならば、すべてが彼一人に集中して疲れ果ててしまうことはなくなり、民もまたすみやかに問題が取り扱われて一日中順番待ちをする必要もなくなり、平安のうちに自分のところに帰ることができるようになると提案した。

[24]「モーセはしゅうとの言うことを聞き入れ、すべて彼が言ったとおりにした」

モーセはしゅうとの助言が正しいことを認め、その提案を受け入れた。すべてイテロの言われたとおりにしたのである。他人の意見に謙虚に耳を傾けることのできる者、これが指導者としての大切な条件である。

[25-26] これは21~22節でなされたイテロの助言の再録であり、それをモーセが実行したことの記録である。もちろんこれは一日や二日でできることではない。膨大な数のイスラエルの民を組織化し、力ある適切な指導者を選び出すことは短期間ではできなかったことであろう。その間に後で見るようにモーセがシナイ山で神から律法を授けられたということも十分考えられる。そうであれば名実ともに彼は明確な神からの掟とおしえを語ることできたらう。

[27]「それからモーセはしゅうとを送り出した。しゅうとは自分の国へ帰って行った」

モーセは貴重な助言をしてくれたしゅうとイテロを見送り、イテロはミディアン地の地へ帰って行った。モーセの妻と二人の子はそこに残って、モーセと行動をするようになったと思われる。

これらの個所から私たちが教えられることは何か。

それはモーセが彼にしかできない重要な役割を担い、他の物事は多くの力ある人々に分担し、組織化し、それがモーセにとってもイスラエルの民にとっても非常に有益になったということである。

すべてのことを一人、あるいは少数の人に集中するのはよくない。モーセはイテロの助言を取り入れて民を組織化した。教会もまたこのことを学ぶべきであろう。少数の人々だけに集中するのではなく、一人ひとりが何か自分にできる分野でその役割を担うことができるようになっていくなれば、キリストの体である教会は、もっとその働きを進めることができるようになり、大きく成長していくことができるであろう。→エペソ4:11~16